2025　第3号

季刊 岐阜高専通信

No.3
発行日：2025/05/16

岐阜高専通信第３号をお届けします。本号から始まった図書館の日常を綴る「図書館徒然」肩の力を抜いて続けたいです。もう一つの新企画インタビュー「わたしの学生時代」、どのくらい続けられるでしょうか。「話してもいいよ。」という教職員の方、こっそりお伝えください。

編集長

Series 図書館徒然

徒然（つれづれ）という言葉は、何もしないで時間を持て余している様子、退屈している様子を表しています。この新しいコーナー「図書館徒然」では図書館のいつもの何気ない様子をお伝えします。

図書館には新しい本が本棚に顔を見せていますので何冊かご紹介します。

まずは「仮想発電所システムの構築技術」

電子制御工学科の青木佳史先生も関わられている本です。タイトルがSF小説ぽくて素敵です。ただし中身はフィクションではなく専門書です。社会に分散する自然エネルギー発電や燃料電池などの小規模な発電設備をネットワーク化し、状況に応じて需給バランスを調整する仕組みのようです。とても未来的な感じがします。

青木先生から本についての解説をいただいたので以下に掲載します。

＜仮想発電所の内容は、太陽光発電や蓄電池などのポジティブな電力を供給する設備のみならず、エアコンなど電力を消費している需要家設備についても、一時的な節電を発電と等価とみなし、それらを大量にかき集めて需給バランス調整に使おうとするものです。（ネガティブな電力ということで、我々電気屋はネガワットと呼んでいます。）本ではどちらかというと、ネガワットをどのように創出、制御するのかが書かれています。＞

この忙しない日々の中で最近「時間」ということが気になります。そこで時間に関わる本を４冊。

「時間治療」「時間デトックス」「本当の時間術」

「世界の一流は休日に何をしているか。」

ゆっくり時間をとって有意義に時間を考えてみてはどうでしょう。

そういえば、大阪万博が始まりました。1970年に開催された大阪万博のシンボルである太陽の塔をデザインした故岡本太郎氏の生き方や思想が最近、再評価されています。「きみは自由に生きているか」「孤独がきみを強くする」「壁を破る言葉」

＜岡本一平画、漱石先生＞PublicDomain
岡本太郎氏の父であり、著名な画家である岡本一平氏は晩年、美濃加茂市で暮らしていました。一平氏は日本で初めての漫画家の一人ともいわれます。

ところで図書館の中で絶えず学生さんが借りていく人気なコーナーがあります。それは「本屋大賞」のコーナーです。「本屋大賞」とは「全国書店員が選んだ いちばん！売りたい本」を選ぶ賞です。2025年本屋大賞受賞の本も揃っています。読みたい本が借りられている時は予約もできるので、気軽にスタッフまでお尋ねください。

図書館はこの春から開館時間が15分短くなり、日曜は休館することになりましたが、月曜から土曜まで開館しています。持て余した時間があれば気楽に本を読みに来てください。

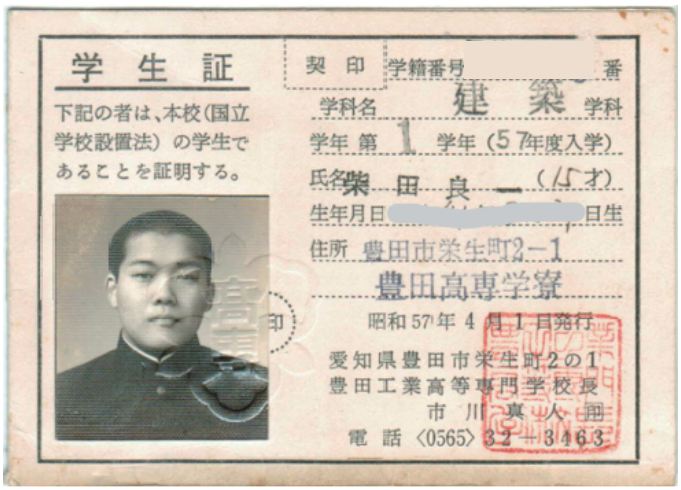
岐阜高専通信でも季節ごとの普段の図書館の様子や蔵書のことなど、お伝えしたいと思います。

今西、清水、今田

Series

わたしの学生時代（柴田良一先生の場合　その１）

このコーナーでは岐阜高専の教職員の皆さんにインタビューし、高専生と同じ15-20歳の頃はどんな学生だったか当時どんなことを考えていたか、深掘りしていきます。記念すべき第１回は副校長（教務主事）の柴田良一先生にお話を伺いました。豊田高専で建築学科の学生だった柴田先生。当時好きだったことから悩みまで、さまざまなエピソードをお聞きすることができました。



15歳の柴田少年（豊田高専入学時の学生証）

ー10代の頃夢中になっていたこと、好きなものは何でしたか？

自転車に乗って古本屋巡りをしていました。豊田にも古本屋はあるんですよ。

ーどんなジャンルを読んでいたんですか？

建築学科だったから建築家とか建築関係の本や、人文系や現代文化系の本も興味があって探していました。

ー本を読むようになったのは高専に入ってからですか？

そういえば中学生の時は全然本を読みませんでしたね。高専に入ってから興味を持つようになりました。本は購入すると高いですよね。でも古本屋に行ったら半額くらいで売ってるし、新刊にはないような古い本が見つかるのが面白かったですね。当時は名古屋市の鶴舞の古本屋によく行ってました。東京の神保町にも行きましたね。空き時間があると古本屋は一生懸命回っていました。当時の図書館だよりに古本屋ガイドマップを書くぐらい。豊田高専の図書館でバックナンバーを探せば見つかるかもしれません。そのころから興味があることは一生懸命やるけど、他は全然といった学生でした。

ー古本屋は同じ高専の仲間と一緒に行っていたんですか？

いやいや、大体１人で行っていました。私が学生の頃はまだ土曜日に授業があったんですよ。土曜日の授業が終わると自転車に乗って豊田の街に出て、ジャスコ（今でいうイオンね）の近くの古本屋に行く。そしてジャスコに行って、よくありますよね、エスカレーターの近くに吹き抜けがあって近くにテレビとベンチが置いてある場所、そのベンチに座って古本を読む。孤独な高専生でした。私はあんまり仲間で動いたことってないんですよ。寮生だったので寮の仲間とかはいたけれども、仲間とつるんでどこかに行くことはあんまりなかったですね。

ー悩んでいたことはありましたか？悩んだときに大事にしていた考えはありましたか？

あったあった。実は途中で一度寮を出たんです。あんまり仲間とうまくいかなくなってしまって。ただそれを寮にいる仲間に相談するわけにはいかないですよね。だから担任の先生に相談したら１回（寮を）出なさいって言われて、何か月か体調不良という名目でいったん退寮したんです。リセットすれば、いろんなしがらみも一回切れますからね。これは今の学生さんにも通じることですね。嫌なら逃げる。ただ退学とか失踪とか、そういう破綻しちゃう逃げ方では駄目で、一時退寮や休学といった正規の手続きを踏んで距離を置くんです。いったん距離を置くことは学校の制度を使えばできますから。現状のままだと冷静になれないので。それに同年齢の仲間はみんな視野が同じレベルなので、誰かがやろうとしたことに深く考えずに加勢して極端に走るばかりで、悩んだときは全然役に立たなかったりするんです。だから２年生のときに１回、学校をやめようと思ったんです。

ー本当ですか！？

私は元々機械工学科志望だったんですが、成績が足りなくて合格できそうもなくて建築学科に入ったんですよ。だから最初建築への興味はなかったんです。それで２年生のとき、木造の建物のトレースとかしてて「ああ違う、もうだめだ。やめよう、やめたい」と思ってしまって。ただそれを担任の先生に相談したら「せっかく入ったんだし卒業したほうがいいよ」「興味がないとやる気が出ないので興味を持ちなさい」と言われたんです。それで興味を持つために図書館に行って、新建築（雑誌名）とかを見ました。内容がよくわからなくても写真を眺めて、自分の好きな建築とか建築家を探していました。そ

ういうことができたのは全部担任の先生の言葉があったからですね。

ーあと、別の居場所を作るようにした感じでしょうか？

そうそう、寮とか教室が居づらかったら図書館に行ったり、担任の先生とか仲のいい数学の先生のところ、学生課の事務のおじさんのところ、いろんな大人のところに行っていました。

今の若い人って世代の違う人には話しづらいのかもしれないけど、大人を頼るっていうのは賢い手だと思いますね。やっぱり大人は社会を経験しているので常識的に判断しますから。だから大人の人とうまく話ができるのはいいんじゃないかなと思います。

ー大人の方にいったん話を聞いてもらうということが大きかったのですね。

そうそう。あと先輩にもいろいろ聞きましたね。私は（なぜか）水泳部だったのですが、水泳部の1、2年から見ると5年生はもう大人ですから。年上の人にやっぱり年の功はあるので。年齢が上で信頼できる人、先輩でも先生でもいいから、大人に聞くっていうのはいいと思いました。

ー振り返って、これは人生の大きなきっかけだった！ということはありますか？

学生たちにはしょっちゅう言ってることなのですが、私が高専をやめようとほぼ思っていたときに、香港上海銀行という建物が建てられたんです。これはほぼ機械みたいな建築なんですよ。それを見て、あ、こんなのありか、こんな建築が世の中にあるんだ、これがありならこういう建築をやれる人になりたいなと思ったんです。こんな建築を考えていいんだったら、もうちょっと頑張ろうかなと。

だからもしこの建築がなかったら、私は2年生の時に高専を退学して、どこか普通高校を受験し、多分、機械の工場に勤めてたでしょう。今ここにはもちろんいないし、建築をやることもなかったと思うんですよ。

ちなみに香港上海銀行を見つけたのも建築の雑誌を読んでいたのがきっかけです。高専の中にいるだけだったら気づけなかったと思います。

ーここが先生の原点なんですね。

そうそうそう。今から思えばですけど、あれがなかったら多分本当に、もう途中で退学してしまうかもしれなかったです。うん…ちょっと話ができすぎてますよね？

ーいや、でもまっすぐですごく先生らしい感じがします。

私としても自分はすごく真面目でまあちょっと孤立している学生という感じ。ただ完全に孤立しているという感じではありませんでしたよ。水泳部に一応入っていて、仲間と遊びに行ったりとかもするし、とんでもない粗相もしたし。……続く

今回はここまでです。柴田少年はどんなことをやらかしてしまったのか。柴田少年の運命は？続きは第４号で。

安藤

Series
こうせん歳時記

こうせん歳時記、今回は写真のみ、今年も美しい花をさかせてくれた前庭の枝垂れ桜です。

キャンパス内の四季折々の出来事や自然、もし上手く写真に収められたら、是非、掲載させてください。

撮影　安藤

Article
岐阜高専のゆかりの地を訪ねて

岐阜高専の発足は、1963年（昭和38年）4月ですが、開校当初はまだ校舎はできておらず、翌年現在の地（本巣郡真正町）に完成するまでの間は、岐阜県各務原市の

鵜沼中学校（現在は各務原市立鵜沼第一小学校）の移転跡を仮校舎として入学式や授業（機械工学科・電気工学科・土木工学科の３学科）が行われ、１期生は１年間そこで学んでいました。

開校の際には桜の木と記念碑が設置されたということですが、その後紛失した模様で行方が分からなくなっていました。（小学校として改修された際に撤去された？）そして、卒業生らが中心となって調査、再興のための尽力がされ、2013 年４月に創立５０周年記念として、同敷地内に記念碑が建立され、しだれ桜が植樹されました。（詳細については岐阜高専同窓会「若鮎会」のページをご覧ください。）https://www.wakaayu.org/

そこで、改めて岐阜高専発祥の地を訪れました。改めて先輩たちの希望と苦労の足跡を肌で感じました。

名鉄各務原線の鵜沼宿駅で降ります。駅の北側に行くと旧中山道の宿場町鵜沼宿があります。

当時の一期生はこの小さな駅の明かりの下で宿題をやったとか。

そして南側に出て１００ｍほど歩くと、すぐ鵜沼第一小学校の校舎が見えてきました。

校舎の南東側の一角に岐阜高専発祥の地の碑がありました。（わかりにくいかもしれませんが百葉箱の後ろ側です。手前の桜が枝垂れ桜です。）

碑には当時の写真が銘鈑として貼り付けられています。

また、左側には「発足の地を去るに当りて昭和三十九年三月十八日」と記されています。

今後も岐阜高専のゆかりの地やその周辺の風土について歩いてみたいと思います。

羽室